魁玉助脚色

大阪朝日新聞
連續掲載世話傳
其後演劇に賢さて

四季詠夢譚

春

神戸楠公社主人の場
布引滝菊廼家夜叉丸の場
志賀知晴住家の場

場割

春の部

神戸楠公社前の場
布引瀧麓菊の家の場
生田神社鳥居前の場
志貴知晴住家の場

夏の部

志貴知晴住家の場
神崎川土堤の場

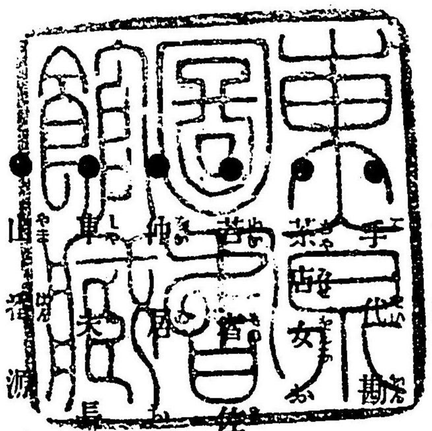
秋の部

武庫郡小學校門前の場
雛子山源兵衛内の場
志貴知晴妾宅の場
福村幕所原の場

冬の部

志貴知晴妾宅の場
傳法村野中の場
志貴知晴捕縛の場

特52
C5



春の部役人替名

- 朝尾茂作
- 下婢れとく
- 丁稚太郎吉
- 手代勘兵衛
- 茶屋女まつ
- 番頭佐七
- 仲仕玉
- 車夫長藏
- 山番源兵衛
- 志貴知晴

夏の部

- 山番源兵衛
- 妹　れ冬
- 下女お竹
- 朝尾茂助
- 車夫長藏
- 志貴知晴

百姓大勢

秋の部

●加古川清
●下男和作
實は夏山繁
●下婢れとく
●源兵衛娘おかめ
●後家お種
●下婢おたけ
●植木屋善兵衛
●同喜八
●大西甚助
●火葬場の三治
●氏丸長藏
●志貴知晴
百姓五人
女生徒五人
妙主一人

冬の部

●加古川清
●茂作の靈
●おとくの靈
●松月亭はる
●妹おふゆ
●下男和助
賀は夏山繁
●氏丸長藏
●志貴知晴

特務巡査八人

造り物本舞臺平ふたい向ぬ正面に檜皮宮造りの門左右筋塀門前に立派成る石燈籠是に楠公社と彫付有り下手一間の屋体横暖簾に藝妓の名前を記し堂ヒま鞆のてうちん澤山茶釜竈水手桶杓茶棚を借り能處に茶店床儿を並らへ松の幹空より同しく枝を釣おゝ一都て神戸楠公前の林庭神樂辻打にて幕明來　ト町人の仕出し出でわや〳〵といふては入る跡出の唄

に成り向ぬ[illegible]れを〻島田かつら下女の拵らへにて小風呂しきつゝみと日傘をさし跡より勘兵衛差附孫繻何人番頭の拵らへにてれとくを呼ひかけながら出て來りて　勘兵衛「是さら呼んでいるにこなたの耳にはは入らぬかといふたら飛んた定九郎も病氣に付き[illegible]貴樣は何所へ行くのしや　お徳「ハイ彖〳〵お叫し申升たとふり母かし申出跡に[illegible]暇をいたゝき只今歸り升る所てムり升る　勘「何は兎もあれ立乍らの咄

しゐ出來ぬ鳥渡あれ成る床儿にまて　徳「左やうならマアあなたお先きへ　勘「先すもしから　徳「さやふなら御免被成升せ　ト歌に成り両人本舞臺へ來り　勘「サアマア愛へかけ玉へト　捨せりぬにて床儿へ腰かける事有て　併し母御の病氣はどふじやな　徳「

有難ふ存し升　おのげさまで全快致し升た夫故にやう〳〵今日戻つて参り升たので厶り升る　勘「さうかいな夫はマアよかりた時に日外はこなたにいはふ〳〵と思ふて居たがツイ能ひ折がないのでおふまて言はなんだが何んとた德どんわしが願ふを聞て下されぬか　德「アノ私しへおたのみとはへ　勘「サア外の事でもないが惚れ升た　德「エヽ　勘「是何も恟りする事はないそなたが奉公に來た其日のちはうつやのなものじや迚め男に生れた所詮にはアヽいふ女を女房にーてトサ思ふたゆへにそなたの身元を余所なから探素をして見さ所尼ケ崎の町はづれで親御は紙屑買をしているとの事いつまでもそんな賤しいくらしをさして置くも氣の毒ちつとやつとの仕送りもして遣りたいとは思へども縁も由縁もない他人をいのよ情け深ひ私しとてみつぐ譯けにもゆかぬトやないかうこて貴樣かうんといふて此勘兵衛の心に隨のへは夫婦の縁て親を養ひ不自由をさせぬ斗りか第一ささまも水仕奉公をさしては置かぬ早速主人へ咄しをして表向きでの宿ろ妻コレたとくすんといふたがよいしやないか　德「アヽモシ勘兵衛樣其御深切は嬉しいけれど私しやチト心願うあつて生涯男は持たぬてゝろ　勘「コレ味い事いふゼ其男をもたぬものが何んで内の若旦那さはちゝくりあふているのじや　德「めつそうないつ私しが其ような　勘「アノマアしらゝぐしい顔わいな毎晩忍ひあふている事は此勘兵衛はよう知つてゆるのじや　德「是ヤマア勘兵衛樣人にこうよれ武庫郡今津村で朝尾といふ方は誰〳〵らぬものもない金滿家此神戸の元町に骨董みせを出して厶るのも畢竟若旦那樣がお好きの道ゆへ其豪家の若旦那が私ゑのよふな水仕女と譯の有ふ筈もなし第一其よふ事がきこへては私しは兎もあれ若旦那樣の外聞にもかゝわるわゆナア　勘「そんなら若旦那と譯かないといふのしやな　德「しれた事いナア　勘「よいは其譯の無いならおれが詞を否とはいふまいサアそこ迄一寸一所に來てくれ　ト手をとるを　德「エヽしらぬわいナア　トふり切るを又袂をとらる　勘「コリヤ手みしかに埒を明けねはならぬわい　ト引よせるを　德「アレ惡ひ事を仕成んもないナア　ト是を辻打に成り兩人捨せりふにてお德逃るを勘兵衛追い廻す事有つてドヽお德は下手茶店の内へ逃ては入る勘兵衛は跡を追つかけては入る此鳴物にて向ふより茂作着附羽織蝙蝠傘商人若旦那の拵らへ跡とり太郎吉縞の着附でつちろ形りにて附そひ出て來り花道にて　太郎吉「若旦那樣大黒座ろ芝居を一寸一ト幕御覽し升せぬる　茂作「馬鹿をいる

早ふ内へ戻らねば用事う濟ぬわい　太「デモ戻りには見せてやると仰つしやつたでは厶り升ぬか　茂「サアさうはいふたなれと先方て骨董の代金三百円といふもの受とつて來たゆへ早ふ内へ歸らねは用心う惡いわい　太「そんなら翌は急度て厶り升な　茂「ハテよいといふに　太「アノきつとて厶り升ふな　茂「エ、五月蠅やつな　ト右の鳴物のにて舞臺へ來り此内茶店の内とりお徳走り出で來り茂作に行當り　徳「是は御免被成れて下さり升せきつい麁想をいたし升た　茂「さういふそちはれ徳てないか　徳「ナ、あなたは若旦那様　太「ヤヤれ徳とんは茶店へは入て汁子善哉でもたへていたのぢやね　徳「何のマアそこ所ではないわいナア　ト捨せりふにて床几へかける　茂「二三日姿かみねぬゆゑ母者人に尋されば母の病氣見舞に泊りがけに親里へやつさがけふは大方歸つてさるで有ふにと仰り〳〵やつさが見りやう為たへてコリヤぞふしたのぢや　徳「サアあなたは此間有馬へお越しに成り升たお留守の内宿から人が參り升して母か急病じやにようつてれ暇を願ふて早ぬ戻つて來いとの事に付まして奥様にれねがひや宿ゑ參り升〳〵た處母の病氣も治り升たゆへ漸〳〵今日歸ろぬせぞんし升て此處へ參り升たる折からお店の勘兵衛さんが　茂「何じや

勘兵衛がぞふしたのじや　徳「チト呵つておあげ被成升せいナア　茂「又てんから申たので有ふ　徳「夫ゆへ茶店へ逃け込ゑ升たら跡あら追かけて　茂「あいつ年に似合ぬ。どうもならぬやりナア　徳「まさ夫斗りでい厶り升ぬあなたと諍のある事を　ト云かけを打消して　茂「ア、是太郎吉こふするがよい私しは チト爰に嘶ーがあるゆへ其間に是て芝居を一まく見てくるがよい　トがま口より十錢札を一枚出してやる　太「夫でもあなた翌の事にせいと仰つしやつたでは厶り升ぬか　茂「サア翌の事と思ふたなれどあんまりそちが見たがるゆゑ　太「ハヽヽ若旦那様はれ徳とんとキッ〳〵で厶り升な　茂「エ、其ような余慶な事をたまつて行け　太「れつとせう　ト鳴ものに成り太郎吉は下手へ行ぬとするを　茂「ア、是太郎吉私しは布引瀧の菊屋へ往て待ているゆへ戻る時にいしらしてくれよ　太「エヽアノ布引の菊の家さで　茂「人力に乘つて飛ーて來い　太「そんならお徳どんとたつた二人りで　茂「サア夫ゆちりど咄しの有るゆへ　太「いよ〳〵若旦那怪しいな〳〵　茂「エヽ又其やうな事をぬかしおるか　太「みつとせう　ト辻打に成り太郎吉下手へは入る跡見送り　茂「ほんに子供とてめつたにゆたんがならぬわいヤヽ爰へかけ

たがよい　徳「イエ〳〵太郎吉とんはかりては厶り升ぬ今も今とて勘兵衛様か　茂「私しとゝなたと譯有る事をは　徳「ハイよふ存してゐり升わいな　ト じつとうつむく　茂「そんならあいつもしつているか　徳「ハイ夫てなぬてもわなたと譯のある事が親御様のお耳に入らばゞのよぬなお呵りを受ふかと夫を思るば私しは苦勞で〳〵なり升ぬわいな　茂「サア夫は私しも心附てはゐるなれゞぬとした事の戯れとり一度う二度と度ひ重なり今ては人の目妻にさへかゝる程の二人りが中何れ親達の耳ゑは入るゑ知れた事ゞふゞそう成らぬうち工風をゝる氣でゐるわゐの　徳「りんなならわなたは夫程迄に賤しゐ此身をお厭おなゝ思召て下さり升か　茂「思わゐで何とせう親の目をは忍ひ合ゐ不孝ゑ成たそなたじやもの　徳「もし若旦那れ嬉しう存し升る　ト寄り添ふとして人目ゐるゆへ跡と先へ氣をかねて辛氣なこなし茂作思入有て　茂「チゝ斯うせう内にゐては人目か有つて嘶しひとつも出來ぬのに爰てあふたは丁度幸ひまだ晝まへて有ふから爰から車で布引へゐてたゞんまでもたへてこふ　徳「ハイ私しもまだわなたにえいろ〳〵お嘶しも厶り升れゞモシ太郎吉とんでも參り升たら　茂「何のわれは好ゐ芝居を見て居ればゆつたに出てくる事ては有まゐ

徳「そんなら參つても大事厶り升ぬのいナア　茂「何んの大事の有るものてけふヲりは誰れに遠慮も氣兼もないのしや　徳「ほんに嬉しい事て厶り升るな　茂「そんならたとく若旦那様　ト辻打ゑ成りそこらから人力ゑ乘ふといふ捨せりふにて茂作先きにおとゝは嬉しさてなしにて跡より付添ひ上手へは入る直にばた〳〵に成り茶店の内とりおまつ新てふ〳〵のつら着附まへされ禰茶店下女の拵ちへにて勘兵衛の胸くらをゝり出て　おまつ「サア一寸來て下さんせ　佐七「マア〳〵よいしやないか　ト佐七茶店の若むものゝ拵へにて留なから出て來り捨せりふいろ〳〵有る

勘「コレおまつ放してくれ咽の佛か潰れる〳〵　佐「是はしたりおまつさんゞういふ譯かしらねとも此往來で見つともないマア此手を放〜被成い　まつ「イエ〳〵放さぬ〳〵ヨいな　勘「ア、助け船人ころ〜〳〵　佐「是サマア放し被成いといふに　ト無理におまつを引放し佐七中ゐ割りては入りとめるまつ「私〜やくやしい〳〵わいナア　ト大きな聲してなく　佐「それ是はいけない全体どうしたのでムり升る　勘「何別ゐどふも斯うもないひやみに私しの胸くらをとらへすつ

ての事にぐつといわされうとーたわい　まつ「何んじや譯が無ぬコレ勘兵衛さんおまへはどのくちでいふのじやぞいな　ト勘兵衛の口のはたを捻り上ける　勘「アイタヽヽコリャれれをどふさらすのじや　まつ「其痛いといふ性根が有るならおまへ生きているのじやナア　勘「此とふりびん〳〵をしているい　まつ「生ているなら聞かしやんせおまへ夫れて濟かいナア〳〵　ト誂らへの合方に成り　佐七とんおまへも聞て下さんせ此兀天窓は神戸元町で人も知つたる骨董屋　勘「ヤイ〳〵兀天窓とは誰の事トや　まつ「れまるの事じやといナア　勘「何所におれの天窓か兀けてゐる　佐「コレサ番頭さんまんざら兀ぬでもなゐからだまりて聞ゐてゐ被成れ。そうして骨董屋がどふーたのしや　まつ「サア朝尾といぬこつとう屋の番頭しやが私しがまだおの店る屋入よ成らぬさき私しをとゑへてとやかういふでは仏んせぬか實は私しの器量をもつてこんな男よつまゝすのでは無けれどもおゐ〳〵拾錢札や二十錢札を一枚りゝくれるもへッイ一ト晩が度ひ重り馴染で見れば否な男も可愛くなり果は親旦那様の目に懸つて暇か出たでは仏んせぬか夫れもゐづれどふうすると口で丸めて夫なりけり一錢の錢も咄しもわからぬもへ代言人も賴んたなれどとふふ〳〵咄しも分らずに泣寐入りに成つたもよけれと今のうゐふ身になつたも元はとゐへはおまへもへ夫れもよけれど今見てゐれば元傍輩て有つたお德どんをとらへてゐやらしゐ事斗りおまゐ夫れて濟むかゐナア〳〵　佐「ハヽンそんならゐせん朝尾に奉公してゐさ時ぶんに此おまりさんをりまみ被成たのか　勘「イヤ最うゐふも面目なけれともおだるゐ時乃空腹に　佐「よつぽどものくゐのゐヽ男だな　まつ「夫しやよつてけふはモウ堪忍袋の緒かきれた是から警察署へ引れてゐて今迄の事をゐヽ立ねはならぬわゐナア　勘「めつそふな今も大勢の中で恥をこのゐた其上に警察署ゐ出られてたまるものか　佐「ろれと知りたら此番頭さんも私し方へは入り下成らねばよゐに斯うゐふ敵を引受け乍ら火の中へ飛込むとゐふが有るものか　勘「何おまへ此女が此茶店にゐるとゐふ事は夢にも知らぬ飛こんたもれ德もへ　まつ「何んしやとへ。モウ此上は約束通り私しを女房に持てゐくれるう但ーは月〳〵に仕送りをしてゐくれるの　勘「ぞふして〳〵アノお德とくらへて見れば五りん錢も出せるものか　まつ「夫か不承知なら警察署へ來ておくれ　勘「アヽ夫斗はゆるしてくれ　まつ「ろんなら私しの言ひ條を立てお呉れかゐナ　勘「夫れしやとゐふて出面像で

は　まつ「ならずは警察へ　勘「めつそうな　まつ「かたを付ておくれか　勘「サア夫は
まつ「サア　勘「サア　二人「サア〳〵　まつ「勘兵衛さん私しの帳はどうしてくれる
のトやぞゐな　ト勘兵衛天窓を押さへて術なきこなし佐七思入有りて　佐「時に番頭さ
ん様子を聞けばおまつとんの起るのも尤ぢや元はとゐへばおまへのはし豆から起つた事
爰て兎やかうゐふて居てはこりちの店の邪广に成るもへマア私しか扱ふて咄しはどふとも
つけよからおまつとんの機嫌直しに奥の座敷て酒の一舛も買被成れゐづれどの道レコでな
ければ咄しは付くまゐ　勘「何んぢや金て咄しをするとゐふのか　佐「サアれまつとんも
一處に來下成れ爰で兎や斯ういふて居ては人立がーて外聞がわるいがな　まつ「そりやモ
ウ行けなら行きもしやうが私しの顔のたつとふにして下さんせへ　佐「夫れハ元より承知
の助サア番頭さん　勘「そんならどふでも行かねばならぬか　佐「警察へうつぎ出された
らどうし被成る　勘「のつぎ出されてたまるものか　まつ「サアムんせいナア　ト歌に
成り一件皆〳〵下手茶店へは入る　返し　造り物木舞墨もつと上手一間常足の二重床
の間小襖櫛形ろちん間竹様附正面三間の二重大和葺の小庇櫛形の欄間見付上手床の間逆い
棚是より下手中障子の襖二重と二重の間廊下打ぬき庭前の中遠見下手落間跡へよせて建仁
寺垣石の手水鉢石燈籠庭木植込いつもの所に切戸口都て菊の家座敷の体流行唄にて道具納
る　ト爰に正面二重上手に茂作猪口をもちお玉着附前たれ仲居のこしらへにて酌してい
る下手にれとく小皿に肴をとつている傍に廣ふたに鉢肴爛徳利を並らへあり双方捨せりふ
にてこゐ有つて　徳「若旦那様御酒をたんとれそごし遊ばしては悪ふムり升　茂「何は
ふ呑ゐとふても猪口に二三杯我慢をして呑だれば顔がまわつ〳〵として暑ふ成つて來たど
ぬぞりぐまねをして下さり升せ　お玉「マアあなたそう仰しやらいでも　徳「イエ〳〵お
玉さん若旦那は眞にわがちぬので厶んすわいなァ　玉「それでも折角お銚子をおとり被成
さものを　茂「イエ〳〵實は此お徳にお飯をさべさせよふと思ふて來升たれと直に御膳と
いふも氣の毒もへに一トてうしはいふたなれど最う〳〵酒は降參じや　玉「れ徳さんたま
へは能いれ内へ奉公にいて此とふに御深切な若旦那に遣われるは浦山しいわいナア　徳「
サア悦んで下さんせ此若旦那様が御深切にーて下さんすので私しも仕合せぢやわいナア
玉「サア私しも此内ゐ奉公には來たなれと斯ういぬ家業の奉公もへ御酒の上への悪ゐお客

に無理をいはれるのを思ふと堅ひ奉公かよいわいナア　徳「成程つらひ事も厶んせふな
玉「併しお徳どん今御膳を焚かけていてちつとの間が厶んすゆゑ御酒もあらす斯うして
厶るも御待遠ふで厶んせうゝら枕をとつて來て上ふかへ　徳「アレ枕を何にせうぞいナア
玉「ハア何にせうとも枕が有れば又どうにかなるといナア　徳「そういふと若旦那と私し
が躍でもあるよふで　玉「有るか無ひかは私しも斯ぬして斯ういふ内の奉公すればそこら
は見て有るわいナア　トれ徳の脊をとんと擲く　徳「アレお玉さん其よふな事を　玉「
ドレ御膳を急いて來升ふわいなア　トれ玉思入有つて駒下駄をはき切戸の外へ出て路次
へは入る両人は顔見合わし　茂「おとく　徳「若旦那様　二人「ハヽヽヽヽ　ト誹へる
合方に成り　茂「道は茶屋奉公をするだけ有つてゑふの二人りのその中を悟つているよふ
すぢやがアノ子は元友達でゝも有つたのか　徳「ハイッイ私しの在所で學校友達て厶んし
たが一ッ所に遊んだ時分ではきりうよぬすの替つたも商賣がらとはいゝ乍ら何んの奉公で
も又つらい事があると見へ升わいナア　徳「奉公といるば皆つらいものけふはマア藪入と
思ふてそゐさも一口呑ではどぬぢや　徳「イエ〳〵御酒はモウ一向ふに　茂「サアさうで
も有ぬが私ゑもけふは極樂ぢや責て猪口に半分でも　徳「さやうならおいたゞき申升ふわ
いナア　ト猪口を受せる　茂「ドレ酌をしてやり升う　徳「是はあなた憚り様て厶り升
る。　と是をはうたに成り酌をしてやるお徳顔をしかめてやう〳〵酒を呑み干しこなし
有て　御酒といふものはにがいもので厶り升ナア　茂「サア其よふな辛いも乃でも祝儀
無祝義よは無くて叶わぬか酒の一徳何ぼうにがふても祝言のときは呑ずばなるまいノウお
とく　徳「あなた誰れと御祝言を遊ばす時に召上るので厶り升る　茂「アイタ
たと婚禮する時に　徳「アレあのよふな嘘ばかり　ト茂作の膝をつめる　茂「アイタ
ヽヽ何をするのじや　徳「デモ其やうな事を仰しやつて獄そふを被成れ升るもへ　茂「去
り迚は疑ひ深い　トお徳を引よせ端唄に成り一寸こなし此とき上手屋体の前側障子を明
ける爰に志貫知晴着附へコ帶好みの拵へよて小布團をしき枕をして寐て居る傍よ煎茶道
具枕元よ並らへ有る能時分に目を開きそつと頭を上け下手一間の両人が咄しを耳にとまり
してなしにてじつと聞耳する茂作お徳は是をしらぬふゝ有つて　徳「そふゝてマアあな
た今日はどちらへお越よなつたので厶り升る　茂「けぬは諏訪山の菊水に御設宿被成れ

て厶る華族さまの方る茶道具と軸をお商む申ーて代金三百円受取て來たのじや　德「夫はマアよいお商ひが厶り升してお目出たう存し升シタが三百円も大金をもつてお出被成れ升たら早ふれ歸へり遊はすがよろしう厶り升る　茂「何の三百や五百の金は何時でも所持しているのじや。　ト此金の事を聞て志貴はそつと立上りさし足して廊下に來り襖の影に立聞している　併しモウ一ッ呑んでお酒はとりに仕升ふ。　サアひとつついでくれ　德「畏り升た。　トは字たに成りれ德酌をする事有て　しかー此節は殊の外無用心なと聞ており升もへ隨分お金を　茂「ハテよいそい女心に三百円といへはそう思ふも尤もなれども。コレ此よふに革袋にいれてちやんと膝元に引寄て置は大丈夫といふものじや。併し太郎吉めは芝居にそつゝをぬかして戻る事を忘れねはよいが。　トいひながらお德をひよせる此とたんにれ德の腕に茂の字の入墨してあるを茂作見付てこなし　コリヤそなたもかいなに茂の字の入墨　德「アゝモシ　ト耻かしさこなしにて隱す又はうたゑ成り茂作一すこなー有て　茂「コレお德何も耻かしかる事はない私しの肘も見て下され　ト左りの肘を見せる德の字の入墨して有るお德見て嬉しさこなーにて　德「そんならおなさも

茂「うなたの名まるの德といふ字の此入墨　德「仮令一日半日お顔を見ずとも　茂「そなたと二人りをらすこゝろ　德「夫程迄に　茂「思わいて何とせう　德「お嬉しう存じ升ト寄り添ふとする此内知晴は思入有つてそつとさし足して元の座敷にそつと戻り煙草を呑み灰吹の音を高くさすり是にて茂作お德は恟りして上下へ立別れ所体をつくろお身形りを直しまじめに成る事ありて　茂「何んとマアけふはなつう暑いぢやないか　ト扇遣おをする此聲を始めて聞し思入にて　知晴「さう仰つしやるは若や朝尾樣ぢや厶り升ぬかト是にて茂作こなし有つて　茂「ヘイ私しは朝尾で厶り升るがシテあなた樣は　知「志貴知晴で厶り升る　トいゝなのら廊下傳ひに出て來る是にてお德はぢりと下手へ扣る茂作ゝ間の襖を明乍ら　茂「是は志貴の先生で厶り升るかマア〳〵こちらへ　知「御免ん下さり升せ　ト捨せりふ有つて知晴ゝ上手茂作は眞中れ德は下手に扣へる　茂「先生誠に失禮で厶り升　が持合し升たる。一杯いゝでム升ふ　知「是は。然らばてちだいゝたし升ぬ　ト茂作盃を出す知晴受て　德「お酌をいたし升ふ　知「是は憚りて厶り升るト茂作は何んとれ肴をとれ德に目顔でしらすれ德心得手を鳴らす内にて　玉「アイ〳〵。

ト返事して下手路次口よりお玉出て來るれ徳切戸口へ來り何それ看をといゝ付るれ玉心得知晴を見て　先生あなたいつお目覺てムり升したれ座敷替りてムり升るな　知「日頃懇意の朝尾氏のれ越しゆへ附け込みに參つさのぢやハゝゝゝ　玉「先生の御馳走と有れよいお看をこしらへて參り升ム　徳「早ぬれたのみ申升る　玉「アイ〳〵　ト是にてお玉は元の路次口へは入る　茂「先生には今日は御遊歩でムり升るか　知「中〳〵遊歩と申譯でもムらぬが諏訪山に病家かムつて是非見舞てくれとの頼み退引成らぬ病家へ見舞に參り升た所何が長閑の時分もる布引の瀧へ參り當家にて晝飯かた〳〵一盃るたむけ升した る所ッイとろ〳〵と寐て退けましたが其晝寐の夢に若ひ男と若ひ女がさし向むで何やらいちや〳〵〳〵と　二人「エヽ　ト茂作お徳扨えと趾しきこなし　知「サアひよんな夢を見升したてやハゝゝゝ其夢に見たれ女中ゑとく似ていらけしやる其お女中何んといつぱいどぬでムるな　徳「イエ私しは不調法でムり升る　知「御酒は少しにかいものぢやが呑んて置かつしやれ婚禮の祝義には是非呑まねはならぬものぢやてな。　トいせんの事をいふれ否と有れは是非がない茂作どのお嬢外申茂作お徳は間のわるさこなし耻入思入れ

茂「おいたゞき申升る　ト是にて茂作盃を受取お徳耻かしそうに酌をする　知「時に茂作との近日君方へ參らムと存しおつたるとこ為當家て御目に懸つたは丁度幸ひ外の事でもムらぬが大阪鞆近邊に古金を多分所持せらるゝ人が有つて賣り拂らい度との義何んと直安に買取工風が如何でムる隨分是は儲ける話でムる若し貴君が御不安心なら自分獨りでも積りでムるが思召はムらぬかな　茂「まうけ口とムれは御周旋下さりませ何時にても御同伴致すてムり升ム　知「此一件も實は十日程いせんに承りました話しなれと何分病家先きも多分あり何りも繁多に取り紛れ今日迄思ひ延引いたした義てムるが万一外方より手かは入り賣拂ひ升しては詐なき事善は急けと申事も有れは何んと是より三の宮の濱車にて御上阪被成れてはいかゝてムるな　茂「成程商人と申ものは一時の時間の相違にてもぬうる品も損をいたすと申事もムり升れは夫ては是か先生と御一所に　知「御上阪被成升るか　茂「れ供いたすてムり升ム　知「お女中着物をとつて下され　ト此時下手路次口よりお玉廣ふたゝ鉢看を乘せ持出て來り跡とり太郎吉返しまへの形りにて出る此内お徳知晴の着類を持て來る　玉「大きに遲ム成りましてムり升る　ト看袋能處へ並らへ　れ内から

お迎ひの見へまして厶り升る　太「へイ若旦那只今は。延引の段は平に御用捨なし下さり升ふ　ト芝居めきていふ　茂「芝居を見せたら是て困る面白かつたで有ふな　徳「太郎吉とんよいれたのーみて厶んしたな　太「チツト其おさのしみはれ徳どん溜場はしつかり利升たで有ふな　知「イヤ最う其溜場で此知晴も甚た迷惑いたした　茂「アレ先生御冗談斗り　トおとく恥かしきおなし脇へ紛らすこなし有て　徳「太郎吉とん其人形は何ント　やへ　太「是か。是は楠公まへで買ふて來た武藏坊辨慶じや一ッ遣ふてお目にかけ升ふう　茂「エヽ阿房めが何をーをるやら子供ら　ヤツエット〳〵〳〵なんとをふで厶り升る　○いふものはわつけも無おものでムり升る。チヽれ徳丁度よい所へ太郎吉が來さそなたは太郎吉をつれて内へ歸り私しは先生の御供をして大阪へ登つたと母者人へいふて下され　徳「夫ではあなたお内へお歸り被成そと是かち直にお越て厶り升るの　太「ろぬしていつた歸りで厶り升るな　茂　サア其用事の都合で一両日隙取るかは知れねども大阪へ着升さら兎も角も手紙は出し升う　徳「どふぞそふして下さり升せそふでないと奥様もれ案事て厶り升ふ　太「お徳どんもお案事で厶り升る　徳「アレ嫌らいな太郎吉とんてはあるわい

な　太「私しはさらおでも若旦那は好きで有ふハヽヽヽ　徳「夫れては私しはモウた暇申升る　知「今日は折角のたたのしみをお邪广いたして甚た氣の毒にござる　玉「御膳かも出來升たろにたべてお歸り被成升せ　徳「イエ〳〵夫れには及ひ升ぬ先生。若旦那様御機嫌とろしう隨分車の中はお氣をれつけ被成升せ　知「どふかお内へよろしくお傳る下されお先きへ　トかぶきめきていぬ誂らへの歌に成りお徳先きに太郎吉付添ひ路次口へは入る　知「私しの着物をとつて下され　玉「ハイ〳〵　ト是にてお玉上手の一ト間へは入り知晴の着物をとつて來る此内茂作も帶を締直し身支度する此内知晴は始終茂作の革袋に目を付る此時内にて濕車の笛の音する知晴思入有て　知「チヽ大阪發の濕車か着さましさと見へる　ト是にて茂作時計を出して見て　茂「丁度是より車で參り升れは時間の都合も　知「手ぜるの首尾も　茂「エヽ　ト茂作合點の行ねこなし知晴羽織を取るのわ　知「イヤ○サア參り升ふ　ト知晴は羽織をきる茂作はがま口より一円札を二枚出して是を取て置てくれといふこなし是ではれ引りかといふ捨せりふ誂らへろ鳴ものにてよろしく

返し　造り物平舞臺向ふ一面に生田の森の馬場前を畫こゝろに書し中遠見所〳〵に松の幹空より同しく釣枝をおろしすべて攝州生田の森馬場先の体庭神樂にて此道具納る

ト下手より長藏紺はつぴ同く江戸はらうけはけち足袋人力車夫好みの拵らへにて笠をのぬり自由車と記せし人力車をひきながら出で來りこなし有つて　長藏「けぬは退引ならぬ用事が有つて尼ヶ崎へお使をいて跡て旦那には至急病家から呼ぶに來たといふて迎ひ車に乘りて神戸の諏訪山へ出て來て見れば旦那といふ事尼か崎へいさお返事もいろくしお迎ひうた〳〵諏訪山へ出て來て見れば旦那には畫まるにれ歸へりに成たとの事夫うら所〳〵方〳〵と尋て見れど何所へ這入つて仏るのか一向穴がわからぬがどこで有ふなまさか福原へ遊ぶに。といふとふな事も有るまいし迎むに出て來て其人に逢わない程馬鹿ものは無むわい　トこんな事い、乍ら人力に腰をかけて摺火を出し莨を吸付呑んでいる跡らへの合方に成り上手よりお徳跡に太郎吉返しまへの形りして出て來り　太「チイ〳〵お徳どん其やうに急がずと最卒度そろ〳〵歩行たらどふじやな　徳「おまへのやうな道〳〵人形を遣ふて芝居事をしている人とつれ立て歩行けるものかいナ　太「其やぬにいふたものでもない。コレ齋藤の武藏坊辨慶が五條の橋よは人を惱ます曲もの有りと聞しかば夫を聽へ召遣わんと。　ト淨るりを語りながら人形を遣ふ事有てド、能き時分に人形の首飛んで落る太郎吉悔りして　ヤ、コリヤ人形の首か飛た。アヽどうせう〳〵アヽハヽヽ　ト大聲上けて泣くれた徳は氣にかゝる思入有て　徳「首が落たとは延喜の惡ぶ夫でなふても最せんから氣に懸つて何やゑ胸騒ぎがしてならぬのに首が落たとはアタけたいな。トレ一寸見せ被成んせいナア　ト右徳人形を取ふとすると　太「イエ〳〵人形を取らすと首を探して下されいの。　徳「エヽマア一寸見せたがよいわいの。　ト無理に引たくる此とさんに人形の左りの手ぬけるお徳悔りして　ヤヽコリヤ人形の左りの手が拔たわいナア　太「それ見被成れまへがあんまり無理に引はつてじやよつてまぬてくれな否じや〳〵　徳「此人形の首が落るせいヽ左りの手の拔けたのは。もしや若旦那様のお身の上よ。アヽ案事られた事であるわいな　太「何の夫れを氣遣ふ事が有るものか若旦那様れ獨りなら案じるせいぬ事も有れと志貴の先生と御一ッ所に御出被成たもの何も氣つかふ事はないていな　ト此せりぬを聞長藏ちつを聞耳たつるこなし　徳「若旦那も手ぶらならば案事をせ

ねど大まい三百円といふお金を持てゐるもへもしや滝車の中で。アヽ氣に懇る事ぢやわいな　太「コレお徳どんそんな取こし苦勞をせふよりは早ふ楠公前へ出て人形乃代りを買ふて下されいのう　徳「エヽそも所ではないわいナア　ト誂らへの合方に成りお徳先きにしんきなるこなーにて思案仕乍ら向ふへは入る太郎吉は人形を見乍らしば〳〵として向ふる附添むは入る長藏は始終人力車の上にて立聞して居る両人の跡見送りこゐし有て　長「今の咄しのよぬすでは内の旦那か三百円の金をせしめふはりかりよ豪家の若旦那をつれ出して味をごまかし内る引込み一ぷく盛りて其金をぽつぽへ入れる旦那のこんたん。旦那が日頃の氣質もへ首尾よをやるはお手のもの。こいつア早う内へ歸つて少ゝ手傳ひふてうわけをもりしり取るがたとへにいふ犬はねおらーて鷹の餌食。こいつア柏子まんが。　ト人力車の楫棒取上るか道具替りのしらせ　直つて來たわい　ト此もよふ宜敷誂らへの唄にて　返し　造り物本舞臺三間の二重向ふ床の間違む棚禿口小袖玉子壁出樣附上下とも落る竹狹みの塀建仁寺垣石燈籠飛石植込み夏卿のあしらいいつもの所に切戸口都て志賀知晴住家離れ座しきの体誂らへの合方にて道具納る　ト二重上手に知晴着流ーにて薄茶の道具を一式並らる茶を立ている下手に茂作着流かしにて薄茶を呑みいるこなし有て

茂「誠に今晩は思わぬ事にて御厄介に相成升して有難ふ存升る　知「何の〳〵ね禮に痛み入升る今霄直に上阪致そうと存しおりたる所下拙も貯へ置きし古金を次手ながら賣拂わんと西の宮の停車場より上り立歸つて見れは退引ならぬ病人が參り何うと手間どり夫故貴君をお待し申誠に意外の失敬平に御用捨に預り度い。　ト此内茂作は薄茶を呑みこなし有つて茶わんを前へ置く　モウ一服差上升ふか　茂「滿服致し升て厶り升るお手まる。ト茶椀を差出す是にて知晴おなし有つて自分茶を点て茶を呑む此内茂作次第に毒氣の廻るこなしにて苦しむ事いろ〳〵ある知晴は是を見てにつたりと笑ふこなし　先生どふ致しました事やら俄に。アイタヽヽヽ。腹中がのふらんいたし升るようで。アイタヽヽヽ　知「今日はあまりの大暑で有つたもへ定めて暑氣の當りで厶ろふ　茂「何かよきお藥でも厶ちば。アイタヽヽヽ　知「アヽイヤ〳〵腹藥召るには及ひ升ぬ　茂「エヽ　ト い、乍ら追ふ毒氣の廻るこなし　知「全快せふと思るば腹藥を致さねば相成ちねど死ぬに何んの藥がいろう　茂「エヽ何んといわりしやる　知「薄茶に混して呑せしげき藥うか〳〵喰ふ

た大馬鹿もの　茂「エヽコリヤ呑んだる薄茶は毒藥で有けたとな　知「藥の利めはきつい
ものな　トにけたりと笑ふ本釣り鐘誂らへの合方虫の音入り茂作くるゝきこなし有て
茂「チエヽ口惜しや腹立や意趣意恨有らばまづこう〳〵とは明さづして毒殺せんとは比怯
のふるまい　知「別に意趣意恨はなけれども今日計らすも菊の家にて寢耳にふつと三百円
所持する事を聞よりも忽ちうかんた一ト工風旨く欺して釣り出したはうぬが所持の三百圓
ちやくふくしたい計りだ金が欲とあたらめてきよく往生するがよいわい　ト憎ていよい
ふ茂作口惜しきてなしにて　茂「仮令毒氣に苦しむとも此返報は　トいヽ乍ら前にある
菓子鉢をとつて知晴目がけ打付る知晴身をのわを際に茂作は庭下駄をとつてよろめきなが
ら立上り知晴に打てゐゝる誂らゐの合方に成り両人いろ〳〵立廻る此うち茂作次第に毒氣
の廻るてなしにて樣側の柱ゑ取附口中より仕かけにて悪血を吐ゑ事いろ〳〵有つて本釣り
打込ド、茂作はくるしみ落入る此間知晴いとつと上手にて伺ひ見て居る事につたりとこな
し有つて　知「是がほんの死あばれ。先ヲ何よりは此カバンを。　ト茂作が持て居りし革
袋を引よせ鍵が無きゆへ側に落たる茂作の紙入の中より鍵を取出し革袋をあけ中より三百
円の紙幣を取り出しにつたりと笑ふ此前よき時分下手より源兵衛縞の單物三尺帶そぼろな
る山番好みの拵らゐにて出て切戸の外ゑ行み内のふよすを伺ふている知晴是を知らずこな
し有て　いつ見ても可愛いやつだ。　トいヽ乍ら紙幣を本箱の中へ入れ死骸を見て
何にしても此死骸どうか人目にかゝらぬとふ取捨てたいものじやがな　ト死骸を見て思
案のこなし此時切戸の口乃外にて源兵衛思入有て　源「其死骸私しが片付升う　知「ヤア
恟り致した　ト此聲に恟りして知晴きつとこなし　源「且那眞平御免被成升せ　トい
ヽ乍ら切戸口を明けすけと内へは入る知晴見て　知「誰れかと思ゐばうちや山番の源兵衛
でないの　源「ヘイ且那毎度娘の病氣御診察に預り升て有難ふ存し升かげで娘の病氣も
全快いたし升たゆへ今日はお禮旁〳〵參り升さ切戸の外はゐちず聞た此御病人先生か配剤の
藥の利目かきゝ過て。イヤサ御病死被成た此死骸私しが取片附をいたし升ふ　トこなし
有てゐふ　知「何かの事を見聞ゐたしたと有れい今更つゝみ隱すに及ばぬ謝禮何程にても
遣ゐそふ程に何れへなり共捨て來やれ　源「ヘイ承知致し升た先此近邊では武庫河原が死
骸を埋むに究竟の場所。併し此儘埋でも宜敷ふ厶り升かな　ト是にて知晴しつと思案の

こなし有て　知「其儘にてば後日の恐れ。　トすつと立て押入より刀を取り出ー　死骸の首を　源「合點てムんす。　ト源兵衛え死骸を引起ろふとする知晴は刀を援放す双方一時の木のかしらにて知晴ーつと刀を差出す是にて源兵衛跡へ下り　サットあぶなね　トしつと身搏へをする知晴は刀をふり上る此もやうよろしく誂らへの合方時の鐘にてよろし

む　や　ち　ー　　幕

明治二十五年八月十二日印刷
明治二十五年八月十三日出版

定價九錢

著作者　大阪市南區笠屋町二百九十三番屋敷　阪田玉助

發行者　大阪市東區備後町四丁目卅六番屋敷　梅原忠藏

印刷者　大阪市東區上難波南之町廿四番屋敷　吉村武右衛門

版權及權利所有
版權合錄

特52 65

特52
65

四季詠夢譚

国立国会図書館

088579-000-6

特52-65

四季詠夢譚 春

阪田 玉助／著

M25
DBJ-0238